

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることにしなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

マルコが伝えた「良い知らせ」

——マルコ伝福音書 訳述・レントのために——

川上直哉

「過ぎ越しと種なしパンの祭り」が、近づいていました。昔々の、イエス様の国の建国の物語を語り直すお祭りでした。

昔々、イエス様の国は、ありませんでした。イエス様の国のご先祖は、大帝国エジプトの奴隷だったのです。その奴隷の苦しみを、聖書の神様は見過ごすことができませんでした。それで、ひとりの人・モーセを呼び出して、エジプトに向かわせました。

いつの時代でも、奴隷は必要です。大帝国を形成するために、家畜は、必要なのです。動物の中で人間だけが特別なわけがありません。牛も馬も羊も家畜にしなければならないのですから、人間の中でも家畜になってもらう人が必要です。そうしなければ、大帝国はおろか、国ひとつ、作ることができないのが人間です。できるだけ多くの人々が安心して生きるために、できるだけ少ない人を、家畜にする。そうして家畜になった人を、奴隷というわけです。

でも、「主」と呼ばれる聖書の神様は、そのことに我慢ができませんでした。家畜とされた人々の、その苦しみを、すぐ近くまで寄って行って見ました。声にならないその苦しみの声を聞きました。それで、この奴隷を助けることを決めました。

エジプトは、数千年にわたって、「ファラオ」と呼ばれる一人の人が支配し続けました。戦争が何度もあって、王朝は変わり、「ファラオ」と呼ばれる人の肌の色も使う言葉も変わりましたが、それでも「ファラオ」が支配し続けたのがエジプトでした。「ファラオ」というのは「大きな家（古い日本語では「おほやけ＝公」）」という意味です。「公（おおやけ）」の立場からすれば、「仕方がない、必要悪として、やせ我慢で」奴隷を使う。だれも、そんな残酷なことはしたくない。でも、「ファラオ」たるもの、その残酷な役回りを引き受ける。だから、みんなが安心して生活できる——エジプトは、数千年にわたり、そのように過ごしてきたのでした。

ですから、聖書の神・主と「ファラオ」との対決は激しいものとなりました。それは大帝国を揺さぶるものとなり、そして結局、名もなき市民が犠牲になりました。犠牲は、ど

んどん、「弱い方」へと押し込まれました。矛盾のしわ寄せは、結局最後、「子どもたち」へと吹き溜まって行く。

聖書の神・主と「ファラオ」との対決の最後は、二つの「過ぎ越し」になりました。一つは、子どもたちの犠牲を残しました。もう一つは、兵隊の犠牲を残しました。

まず、天から恐ろしい死神がやってきて、子どもたちを皆殺しにしたのでした。この死神から逃れた家は、一つもありませんでした。ただ、「子羊」の喉を切り裂き、その血を鉢に溜め、それをペンキのようにして家の入口の周囲に塗ると、その死神は、その家に入ってこれなかった。この秘密は、ただ、奴隷たちにだけ、知らされました。それで、奴隷の家の子どもは助かりましたが、その他のすべてのエジプトの子どもたちは、王の家でもスラムの家でも、全員、一晩で命を落としたのでした。

このことで、エジプト中はパニックに襲われました。不吉な恐ろしい奴隷たちに、早く出て行ってもらおうと、空気は一変したのでした。エジプトの人々は贈り物をして、「お願いだから出て行ってくれ」と頼んだのでした。これが一つ目の「過ぎ越し」でした。

その後、パニックが治まると、すさまじい憎しみがエジプト人を捕らえました。「あの奴隷を皆殺しにしてやる」という思いです。「ファラオ」は軍隊を率いて、出て行った奴隷たちを追いかけました。解放された奴隷は、その喜びもつかの間、恐怖に襲われ逃げまどいます。「ファラオ」は巧妙に軍隊を指揮し、解放奴隷たちを海辺に追い詰めるのです。追い詰められた奴隷たちは、驚くべきものを見ました。海が、巨大な風にあおられて、二つに裂けてしまったのです。解放奴隷たちは、その海の底であった場所を歩いて渡りました。慌てた「ファラオ」は、解放奴隷たちを追って海の底であった場所に突撃します。すると、海は突然元に戻り始め、当時の世界で最強と恐れられたエジプト軍は、海の藻屑と消え去ったのでした。これが二つ目の「過ぎ越し」でした。

この出来事を忘れないように、ということで、「過ぎ越しの祭り」が、一年の最初に設定されました。それは大麦の収穫の時期に定められ、春の収穫祭という意味も込められていきました。この時期、冬が終わってほっとした頃、一週間をかけて、「過ぎ越しの祭り」が行われます。そのお祭りの中心は、「種なしパン」にありました。家々で、収穫された麦の粉を使って、パンを作ります。その際、イースト菌（パン種）を入れないのです。これは、「過ぎ越し」の物語を一週間かけてみんなで再演する仕掛けでした。昔の神話物語によると、「羊の血」の秘密を教えてもらった人々は、その惨劇の後にすぐ、逃げられるように、あの恐ろしい夜の内に準備を整えるよう、命じられました。具体的には、すぐにパンを焼いて、旅の間の食料を準備すること。そのパンは、腐らないように、水と塩だけで作ること。イースト菌（パン種）は、入れないこと。そして、実際、その堅い煎餅のようなパンをたくさん持って、人々はエジプトを脱出したのでした。それで、「過ぎ越しの祭り」は「種なしパンの祭り」ともなりました。このお祭りの一週間、食卓で「出エジプト」の奴隷解放物語が語られることになります。その時、「種なしパン」と一緒に「苦い野菜」を食べます。この建国物語は、苦みが伴うものなのです。そして、この祭りの期間、イエス様

の国の神殿では、特別な儀式が行われます。つまり、「子どもたちの命を救った、身代わりの羊」が屠殺され焼かれて神様に捧げられる、という儀式が行われるのです。普段からいつも焼肉と生血の匂いが立ち込める神殿は、この「過ぎ越し」の祭りの時、いよいよ多くの人が集まりました。春になって、暖かくなっていますから、大量の蠅も、神殿を飛び回っていました。

この「過ぎ越しと種なしパンの祭り」が、2日後に迫っていました。神殿を支配している人々（祭司）と「学者」と呼ばれた人々は、何とかしてイエスをだまし討ちにして殺そうと、機会をうかがっていました。そしてこう話し合っていたのです。「この祭りの間はいけない。こんなに人が集まる中で、騒動が起こったら、大変だ。ローマ帝国軍が我々を監視している。騒乱罪に問われてしまったら、我々は一巻の終わりだ。よくよく、自重しよう。」

さて、イエス様はベタニア村にいました。「癩（らい）」とか「どす」と呼ばれた、体の腐っていく病気を癒してもらったシモンという人の家にいました。シモンの家の客間で、当時の習慣通り、体を横にしてくつろいでいますと、一人の女性が入ってきました。手には淡く白い石を薄くくり抜いた小さな壺を持っています。その中には「ナルド」と呼ばれる香油が入っていました。それは本物で、とても高価なものでした。この女性は、この香油の入った繊細な壺を割って、その油をイエス様の頭に塗って差し上げました。——これは、この地域の「高貴なお客様」へのもてなしの、正式で最上の作法でした。この地域はとても乾燥しており、一日過ぐすと髪の毛は乾ききり、肌は白く粉を吹いたようになってしまいます。それで、その髪の毛と額に油を塗って差し上げるのが、賓客（ひんきゃく）への「おもてなし」となっていました。

「それにしても、贅沢（ぜいたく）にすぎないか？」と、それを見て、激怒し始める人がいました。イエス様の傍で、「宮清め」の後の大騒ぎに追われたお弟子さんの一人でした。人を隔てて差別する装置になっていた神殿は、転覆されました。そこはすべての人が平等に大切にされる場所となりました。そこで、ものすごいたくさんの人が、食事をします。その食べ物は、どうするのか。人を区別し上下を付けて、そうしてお金を流して経済を回し、人々は食事を手に入れてきたのです。それをやめる。そうしたら、食事一つでも、とんでもなく手間がかかることになります。その経費も莫大です。そのことに頭を痛め苛々（いらいら）していた一人の弟子の心が、この穏やかでのんびりした客間での出来事を見て、思わず怒りに燃えてしまった、という次第なのでした。「そんなことをして、いったい何になるのだ。その香油を、無駄遣いして！ それがあれば、デナリ銀貨300枚は、手に入る。今、神殿にいる貧しい連中全員の一食分は、それで賄えるのに！・・・」そう言って、納まりません。

イエス様は、その声に応えてこう言いました。「そのままにさせてあげなさい。なぜ、この人を困らせるのですか。彼女は私に、良いことをしてくれました。貧しい人たちは、いつも、あなたの周りにいるでしょう。助けてあげたいなら、いつでも、してあげられるだ

け、良いことをしてあげなさい。でも、私は、いつもあなたと一緒にいられるわけではないのです。彼女は、精一杯をしてくれたのです。この香油は、最も高価なもので、死者の弔い（とむらい）の時にも用いることができるほどのものです。彼女は、私の弔いをしてくれたのです。」

みんな、ぼかん、としてしまいます。今、イエス様の活動は、最盛期を迎えたばかりです。歪んだ（ゆがんだ）神殿は正されました。それを阻む人々は撃退されました。あとは、素晴らしい神の国を組み立てていくばかり、のはずなのです。でも、みんな、ひとつ、忘れていました。その素晴らしい作業の「コスト」は、どうなるのでしょうか。歪んだ神殿で生計を立てていた立派な人々、その中で自分の夢をかなえている権力者、また、その社会の歪みから利益を吸い上げているローマ帝国は、いったい、今、どうしているのか。みんな、そのことが見えていません。ただ、イエス様だけが、それを見据えています。「奴隷が解放されるときには、巨大な犠牲が払われた」ということ。そのことを、「過ぎ越しと種なしパンの祭り」は、はっきりと語っている。その祭りの準備として、イエス様は、この叱り飛ばされた気の毒な女性のおもてなしを、祝福してこういいました。

「アメン！ 今、私はあなたたちに言うておきます。神様の良い知らせが語られ宣言される所では、世界中どこであっても、この香油の出来事が語られます。そうして、彼女のしたことは記念されて行くのです！」

私たちが「良いこと」をしようとする、誰かがきつと、悪口を言います。「そんなことをしても無駄だ」「もっと良いことがある」等々……。でも、イエス様は、そんな私たちの「なけなしの善行」を見つめて、それを祝福してくださる。その小さな働きを、想像もできない大きな事柄に組み込んでくださる。そんなことを、私たちは、この物語を通して、いつも思い出すのです。

でも、この時が、一つの決定的なタイミングになりました。「ケリヨト村のユダ」という言葉を縮めて「イスカリオテのユダ」と呼ばれたユダが（イエス様のお弟子さんには「ユダ」という名前の人がたくさんいたのです）、その場を離れていきました。このユダは、「使徒」と呼ばれた12人の一人で、みんなの信任篤（あつ）く、会計の責任者をしていました。ですから、この「香油」の出来事に、一番複雑な思いを抱いた一人だったのです。そして、イエス様の言葉に躓（つまづ）きました。「もう無理だ。私が何とかしよう」と、彼はその場を離れました。そして、神殿の管理者である祭司たちの所に行ったのです。「落としどころ」を探しに行ったのです。祭司たちは、内心、大喜びしました。そして、イエス様の巨大な活動の「落としどころ」を付けるための経費を持とう、と言いました。正直、これは、ユダにとって、本当に有難いことでした。毎日、ものすごい金額の経費が、新しい神殿の維持管理にかかってしまっていたのです。こうして、ユダはスパイになってしまいました。イエス様を引き渡し、あの「犠牲の子羊」のように屠（ほふ）って殺す、その段取りをつける役割を、ユダは引き受けてしまったのです。

こうして、「過ぎ越しと種なしパンの祭り」の準備は、着々と進んだのです。イエス様

も、みんなの知らないところで、そのお祭りの準備を進めていました。実は、イエス様は、あのギリシア語を話す「フェニキアのお母さん」の所から戻ってきて以来、ずっと、この時を狙って運動を組み立てていたのです。「過ぎ越しと種なしパンの祭り」の前に、宮清めをする。そして、新しい「過ぎ越しと種なしパンの祭り」を行う。その準備は、いよいよ整いつつありました。

「過ぎ越しと種なしパンの祭り」の初日となりました。この日、日没とともに、お祭りが始まり、神殿ではこのお祭りの始まりを祝って「羊を屠殺（とさつ）する」儀式が行われます。お弟子さんがイエス様に訊ねました。「先生、今日は、どこでお祝いのお膳を囲みましょうか。種なしパンを食べる場所を、用意しに行ってきますが・・・」。何しろ、巨大な政治的運動を成功させつつある「日の出の勢い」のイエス様です。どんな「過ぎ越しと種なしパンの祭り」をしたらよいのか。これまで、こんな経験は初めてのことばかりのお弟子さんたちは、ワクワクしながら、でも少し不安を感じながら、訊ねました。そこで、イエス様はお弟子さん二人を選び、こう言いつけました。「さあ、エルサレムの市内へ行きなさい。そうすると、一人の男の人が待っています。水瓶を運んでいるはずです。その人について行きなさい。そして、その人が入っていく家までついて行くのです。その人が家に入ったら、その人に声をかけてこう伝えなさい。『先生が言っておられます、私と弟子とが、お祭りのお膳を囲む場所は、どこでしょうか、と』。」二人の弟子は出て行き、市内へ入りますと、確かにイエス様のおっしゃったとおりの人がいました——すべては「手配済」だったのです。こうして「過ぎ越しと種なしパンの祭り」の準備が整ったのです。

夕刻となりました。お祭りの一週間は、日没とともに始まるのです。イエス様は「使徒」と呼ばれた12人のお弟子さんたちと（つまり、あのユダも一緒に）食卓に着きました。当時の風習に従って、客間で足を投げ出し寛（くつろ）いで、食事が始まりました。でも、イエス様の様子は、何か緊張した感じです。食事をしながら、イエス様はこんなことを語り始めました。

「アメン！あなた方に言います。あなたたちのうちの一人が、私を裏切ります。今、ここで一緒に食事をしている一人です。」

この言葉を聞いたお弟子さんたちは、不意を打たれたような、胸がつぶされたような気持ちになりました。そして、一人ずつ「まさか、私ではないですね」とイエス様に訊ねたのです。イエス様は黙って一人ひとりを眺めて、こう言いました。「この中の一人です。私と一緒に、この同じ一つのワインに浸して食べている、その一人です。」そう言って、イエス様は食事を続けました。主食は、とにかく堅いパンです。一つのどんぶりのようなお椀にワインを入れ、それを回し飲みしながら、このパンを食べます。イエス様は食事をしながら、話を続けました。「確かに、そうなのです。『人の子は逝く』と、旧約聖書に語られたことは真実です。つまり人間というものは、結局、誰かの犠牲になって死んで行く——しかしそれにしても、人を裏切ってしまう人、他人の犠牲を踏み台として行く人に、禍いあれ！その人に降りかかる禍いを思えば、あるいは、その人は生まれない方がよかったの

かもしれない。」そして、食事を続けながら、イエス様は――

パンを取り、これを祝福して
パンを割き、皆に分け与えて
そして、こう言った。
「取って、食べなさい。私の体だ。」

そしてお椀を取り、
感謝をささげて
皆に回した。
皆は、これから飲んだ。
イエスは皆に言った。
「これは、私の契約の血。
多くの人のために、注ぎ出されるもの。」

そして、イエス様はこう言ったのでした。

「アメン！あなたたちに言います。私は、もうこの後、葡萄の実で作ったものを飲むことはありません。神様がすべてを良くしてくださるその時まで、これでおしまいです。ただし、神様がすべてを良くしてくださるその時、私は新たなワインを飲むことでしょう。」

ちょうどその頃、神殿では、盛大に「犠牲の羊」の血しぶきが上がり、大量の血液が聖なる鉢に集められ、それが神殿の至聖所に注ぎかけられているところでした。「結局、誰かが・何かのいのちが、犠牲になる。そうして私たちは、どうにか生きている。この厳粛な現実！」と、重々しい儀式がお祭りの参加者に語り掛けていました。でも、「それはもう、終わりだ」と、イエス様が宣言されたのです。ただ、ご自身の肉に見立てたパンと、ご自身の血に見立てたワインとを共に分かち合って。ご自身を裏切り、世界の現実の前に絶望して行く弟子たちに、本当の希望を授けるために。

この食事は、不思議な時間となりました。それは時空を超えて、全世界につながる食事となりました。「誰かが犠牲にならないといけない」ということが露呈する時、その場で、いつも、この食卓が現出します。イエス様と一緒にこの食卓を囲んだ人々は、讃美の歌を歌いながら、食卓を離れ、外へ出て行ったのでした。

外は暗い夜の闇の中でした。歩きながら、イエス様はお弟子さんたちにこう言いました。

「あなたたちは全員、躓きます。
私が羊飼いを打つ。
羊はすべて 散り散りになる。」

と、旧約聖書のザカリヤ書 13 章 7 節にある通りです。しかし、いいですか、私は甦ります。そして、今度は、あなたたちを、あの辺境の地・ガリラヤの地へと連れて行きます。ここ・首都エルサレムに、あなたたちを連れてきたのと、それは同じように、です。その時、また一緒に、あの現場に戻ることにしましょう。」

すると、「使徒」と呼ばれた 12 人の一人で、イエス様が「ペテロ（ゴツゴツしたイワオ）」と名付けたシモンが、イエス様にこう言いました。「もし、この全員が、この暗い夜道に躓いても（つまり、あなたに幻滅して裏切るようなことになったとしても）、私は、そうしません。」イエス様は、そんなペテロにこう言いました。「アメン！あなたに言います。あなたです。あなたこそ、この夜、鶏が二度鳴くその前に、三度、私を否むでしょう。」するとペテロはいよいよ言いました。「もし、あなたと死ななければならなかったとしても、本望です。私は、あなたを否んだりしません。」そこにいた全員、おおよそ同じことを、口々に語っていました。

それからイエス様とお弟子さんたちは、「ゲッセマネ」と呼ばれる山に来ました。「ゲッセマネ」というのは、「オリーブ油の搾油機」のことでした。この山には、たくさんのオリーブが生えていて、そこから取れる実で油が良く取れた。それは機械で押し潰され・摺（す）り潰されて人々の生活の基礎を支えた。そんなことを連想させる場所に、イエス様は行きました。この場所は「いつも」イエス様が人目を離れて静かに過ごすために行く所でもありました。そして、そのことは、あのユダも、よく知っていました。そして、そのことは、ユダを通じて、当局にも知られていたことでした。なんだか暗い、いつもよりも静かな、ゲッセマネの山でした。

いつもの所に到着すると、イエス様は、お弟子さんたちにこう言いました。「私は、祈っていますから、その間、ここに座って待っていてください。」そしてペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、もっと奥の方へ入って行きました。そこで、イエス様は何かに驚き、苦しそうに、どうしてよいか分からない思いにとらわれました。それで、イエス様はお弟子さんたちにこう言うのです。「私の芯まで悲しみが満ち、もう死んでしまいそうなほどです。ここにいて、目を覚ましていてください。」時刻は夜です。オリーブの林の中はずいぶん暗く、すぐそばの人のこともよく見えません。イエス様の様子に、ただならぬものを感じた三人でしたが、もうずいぶん坂道を歩いてきたのです。先の宴会のお酒が回ってきていました。静かな暗闇の中で、イエス様の低く唸（うな）るような声は、聞こえていたのですが、どうにも眠く、意識が遠く、なっていました。

そんな三人から少し離れたところで、イエス様は、地面に身を投げるようにして「できることなら、こんな苦しい時間が、早く過ぎ去ってほしい」と願い、「アッバア、アッバア！」と呻くように祈り始めました。「アッバア」とは、この地域での「父」を呼ぶ幼児語（現代日本でしたら「とと」とか「おとう」とか「パパ」）です。そして、その祈りはこう続けました。「お父さん、何でもできる、お父さん。この杯を、私から取り上げて、どこか

にやってしまってください。でも、私の思いではなくて、あなたの思いを・・・。」

それからイエス様は、三人のお弟子さんの所に戻ってきました。三人は、眠っていました。イエス様はペテロに、こう呼びかけました。「シモン、シモン！」——ペテロ、というのは、「イワオ」という意味です。しっかりした礎石（そせき）のように、と、そんな期待を込めて、イエス様が付けた、あだ名です。でも、今、彼は眠りこけています。人間としての地金（じがね）が出て、元のシモンという一人の弱い人として、そこにいる——「眠っているのか。こんな短い時間でも、起きていられないか。目を覚まし、祈るんだ。そうしたら、神様に試されるような目に遭わないで済む。」「ちょっと前、何と言っていた？その時、あなたを衝き動かしたその思いは、今もここで、あなたの胸にあるはずだ。でも、それを受け止めるその肉体は、とても弱くて頼りない。だから、目を覚まし、祈るんだ。」

人は、どうして良いかわからない時があります。治らない病。いつまでも続く貧乏。逃げられない暴力。そして、死。いざ、自分がその現場に立たされるとき、人は皆、「こんなはずでは！」と驚き、困惑し、悲しみに満たされます。もっと辛いことには、そんなとき、周りの人が皆、心を痛めながら、離れて行くのです。一緒にいることができない。一緒に苦しむこともできない。そのことに、離れて行く人の心は痛みます。「一緒にいられる力がない」——離れて行く人は「自分はこんなものだったか」と、深く心を痛める。そんな時が来る。そんなときには、目を覚まし、しっかりその弱さを見つめて、そして祈りなさい。そう、イエス様は、今も、この物語に触れる一人ひとりに、語り掛けています。

そして再び、イエス様は三人から離れて、先ほどと同じように、祈り始めました。

どうしてよいか分からない現場にいる人と、一緒にいたいと願っても、その願いは、ほとんどかないません。痛みは、その本人にしか、分からない。その悲しみも、怖さも、そばにいる人には共有できない。イエス様は、離れて行きました。その祈りは、一人で神様と向き合うためのものです。一緒にはできない。でも、その「孤立の辛さ」は、イエス様とも、分かち合える。共にいたいと願うのに、それができない辛さ。これがつまり、肉体を持った人間の限界なのでしょう。思いや心を隔てる肉体が、私たちを引き離す。だから、目を覚まし、その「孤立の辛さ」だけでも共にできれば。お弟子さんたちも、そう思っただけなのですが——。

イエス様がまた戻ってみますと、やっぱり、三人全員、眠っていました。どうにも、その瞼（まぶた）が重くなって、耐えられなかったのです。ふと気が付くと、悲しげなイエス様の顔が、暗がりの中ではっきりと分かりました。もう、三人とも、何と言っているか、分からない。イエス様は何も言わず、また離れていきました。

三度目、イエス様は戻ってきた時に、こうおっしゃいます。「この後はもう、眠っていない。まだまだ、道は遠いから——。さあ、御覧なさい。いよいよ、『人の子』が、あの頓珍漢な連中に、引き渡される時が来ました。さあ、もう起きなさい。私を引き渡す者がやってきました。」